

女子美術大学アート・デザイン表現学科 3年次・選択

メディアクリエーション演習 (〈インタラクティブ〉 特別授業)

講義 第3回 近代芸術について (1)
～ 啓蒙思想と「芸術」の誕生

(2014-11-14)

担当： 石井 拓洋

ishii05042@venus.joshiabi.jp

2014

講義 第3回と第4回のねらい

「インタラクティブ・アート」というものが在るのであれば、

〈インタラクティブではない〉アートの存在が前提となっているはずだ。

なぜなら、「インタラクティブ・アート」の芸術的意義とは、

〈インタラクティブではない〉アートの在り方について、

批判的に乗り越える試みであることにこそ見い出しうるからだ。

「インタラクティブ・アート」が、批判の対象とした、それ〈ではない〉アート。

その淵源となるのが「西洋近代芸術」である。

なぜそう言い切れるのか？

それは、自律性を理念とするのが「西洋近代芸術」なのであり、
そもそも、そこに「インタラクティブ性（相互関連性）」は存在しえないからだ。

さて、

では、一体なぜ、当時「インタラクティブ性」よりも自律性が理念されたのか？

その歴史的経緯、社会的背景とは？

また、そこに、芸術として、どのような意義がみいだされていたのか？

さらにまた、そこには、どのような乗り越えられるべき問題があったのか？

「インタラクティブ・アート」を考え、制作する上で、
その存在の前提であり、また、その対極に位置するところの、
本来的に非インタラクティブな「西洋近代芸術」に関する知見は
大きなヒントとなるに違いない。

したがって、このような授業の意図から、
ここで「西洋近代芸術」を取り上げたい。

ただし、この壮大なテーマ対して、二回限りの講義という少ない時間であり、
内容が常に不十分であることを自覚しつつも、
出来る限りその内実に迫ってみたい。

本日のメニュー

- 【講義第3回】 近代芸術について (1)
～ 啓蒙思想と「芸術」の誕生
- 【実習】 詩の題材の選択、詩の世界の解釈

【講義第3回】 近代芸術 について (1)
～ 啓蒙思想と「芸術」の誕生

時代区分としての「近代」とは？

(前回)

きんだい 【近代】

2. (modern age) 歴史の時代区分の一。広義には近世と同義で、
一般には 封建制社会 のあとをうけた 資本主義社会 についていう (広辞苑 p.733)。

中世
↓
近世

11C頃 「封建社会」
17C頃 「絶対王政」を経過

(主従関係)



↓
近代
※1750? ~ 1960?

18C末 「フランス革命」 ~
「市民社会」の成立 (封建社会の打破)

(自由と平等)

↓
(現代)

(20世紀半ば : 大衆消費社会、情報化社会)

近代主義 modernism

- ・ 秩序よりも進歩
- ・ 宗教よりも科学
- ・ 個別主義 (※具体)よりも普遍主義 (※抽象)
- ・ 属性原理 (※ 身分など)よりも業績主義 (※ 実力)が尊重

封建社会から資本主義社会への進化・発展の駆動力の一つが、この種の エートス。

「この種のエートス」
(持続的な特徴)

=

啓蒙主義 的特徴
(蒙きを啓らむ , くらきをあきらむ)

(前回)

• 啓蒙思想 Enlightenment

- 17Cから18Cの西欧における旧弊打破の革新的な思想
- 合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜をした
- 理性的思惟によって**宗教的権威**や**王侯貴族に抵抗**した
- 政治、教育を通して人間生活の**幸福の増進**を理念とした
- **基本的人権** (自然権 = 人が生まれながらに有する権利) の萌芽
- その成果は『**百科全書**』 (**ディドロ**ら編, 1751-80) に編纂

- 「キリスト教・王侯貴族」のためから、**「市民」のための生活へ**
- 啓蒙思想が「近代」を導いた

「物心二元論」 (デカルト以降) (前回)



- 西洋中心主義
- 進歩主義
- 人間中心主義 (個人主義)
- 要素還元主義
- 機械論

各項目は相互に関わりあっている

(特徴のそれぞれの説明は 第二回講義資料を参照)

「今日われわれが普通に使用している『芸術』という概念は
もともと西洋の近代社会において成立した概念である」

[村田誠一 : 242]

「今日われわれが普通に使用している『芸術』という概念は
もともと西洋の近代社会において成立した概念である」

[村田誠一 : 242]

※ 「われわれが普通に使用している『芸術』」？ (以下は石井の思いつきを列挙)

- ・ 作者の個性や創造性を開示したもの？ そして、新しい表現こそ良し？
- ・ 実用的価値をはなれた、作品固有の美的価値をもつもの？
- ・ とにかく、作者がやりたいことをやった軌跡、感情や耽美のカタルシスの場として？
- ・ 美術館とか、オペラハウスとか、やはり格調や教養を感じさせる一面も？
- ・ 「胎教にモーツァルト」など、生物学的にも、本来的に人間にとって良い、とも？
- ・ 義務教育での芸術など、国民国家の一員として有益なるものを付与するもの？

近代において、いかにして、
そのような「芸術」が誕生するに至ったか？
啓蒙思想とどのように関わっているのか？

(主たる参考文献)

松宮秀治『芸術崇拜の思想：政教分離とヨーロッパの新しい神』東京：白水社、2008年。

「近代」以前 (16C～18C) の 西欧は

「絶対王政」の時代

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



オーストリア 「ハプスブルグ朝」 シェーンブルン宮殿



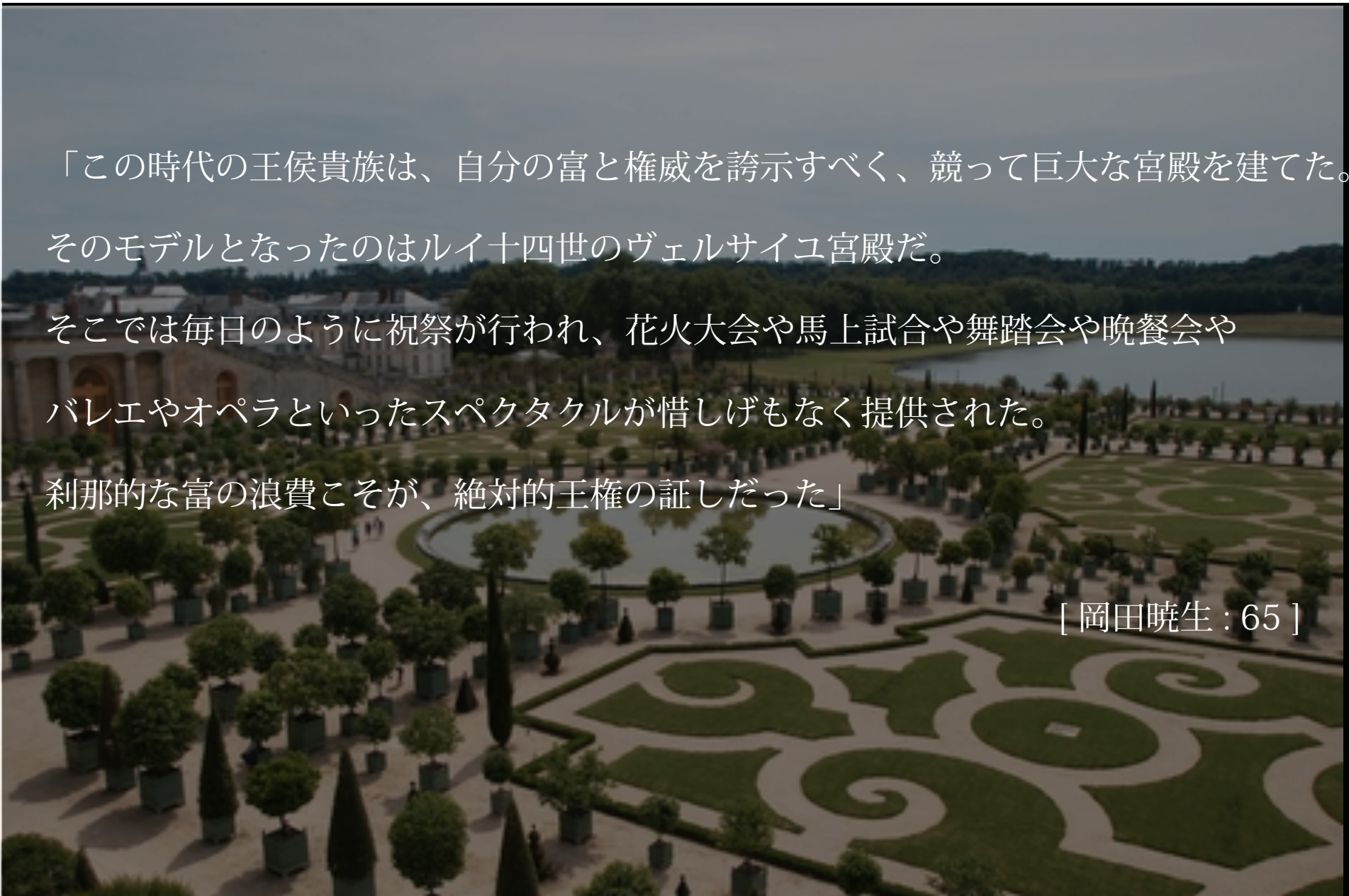
ハプスブルグ帝国皇帝の離宮 (ウィーン)。

「この時代の王侯貴族は、自分の富と権威を誇示すべく、競って巨大な宮殿を建てた。
そのモデルとなったのはルイ十四世のヴェルサイユ宮殿だ。

そこでは毎日のように祝祭が行われ、花火大会や馬上試合や舞踏会や晩餐会や
バレエやオペラといったスペクタクルが惜しげもなく提供された。

刹那的な富の浪費こそが、絶対的王権の証しだった」

[岡田暁生 : 65]



「『王は願望を述べ、芸術家たちは構想を提出し、役人達は計算し、委員会では協議が行われた。手職人の一隊、大工、画家、仕立屋、庭師、料理人が動員された。

〔中略〕数千人の労働者が10万時間働いた、— それもおそらく一夜のうちに浪費されるためであった』（※ リヒャルト・アレヴィン『大世界劇場』より）」

「花火、衣装、食事、建築、噴水、庭園、芝居、踊りなどと並んで—— こうした壮大な祝祭を演出するために欠かせない小道具の一つが、音楽だったのである」

[岡田暁生 : 65 - 66]

近代以前の世界。

「十七・十八世紀の絶対王政とそれを支える宮廷文化は、

『権力の視覚化』

という政治手法にその基礎を置いていた」 [松宮: 52]

近代以前の世界。

「十七・十八世紀の絶対王政とそれを支える宮廷文化は、

『権力の視覚化』

という政治手法にその基礎を置いていた」 [松宮: 52]

「『奢侈』〔ぜいたく〕こそが、絶対主義王政の政治基盤」

[松宮: 44]

ロ可可様式 Rococo Style



D.ツィンマーマン設計 「ヴィース巡礼教会」(1745頃) (ドイツ)
※ この建物自体は絶対王政とは直接関係ないが、

ロ可可様式 Rococo Style (音楽)

- ロ可可音楽

バロックの後、古典派音楽の前。

ルイ15世の時代(在位 1715- 1774)

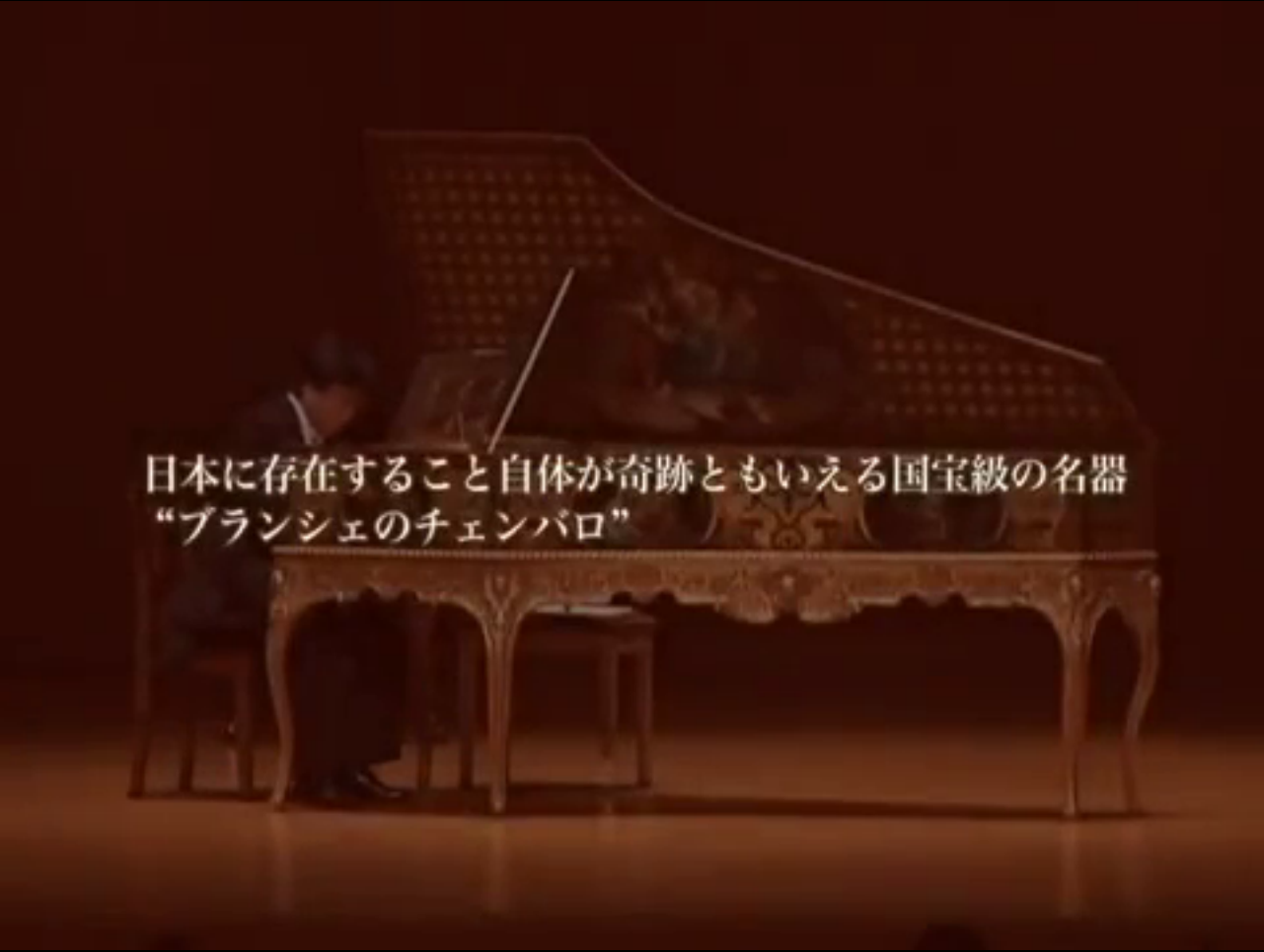
装飾的表現、優美・軽快、貴族的・フランス的

代表的作曲家 フランソワ・クーブラン(1668-1733)

- フランスのルイ15世時代の宮廷作曲家
- ギャラント様式
- ロ可可音楽の代表作に「クラウザン曲集 1巻～4巻」(1720年頃)

<http://ml.naxos.jp/album/fl23090>

(試聴: NAXOS Music Library より)



日本に存在すること自体が奇跡ともいえる国宝級の名器
“ブランシェのチェンバロ”

ロココ音楽 Rococo Style Music の例 (映像: 3分程度)

Youtube 「【中野振一郎氏演奏】18世紀フランスのチェンバロ / Blanchet Harpsichord」より

(この映像内での曲目)

1. ジャック・デュフリ 《クラヴザン曲集 第2巻》より 〈ラ・ヴィクトワール〉
2. フランソワ・クープラン 《百合の花ひらく》
3. ジャック・デュフリ 《三美神》

• 啓蒙思想

Enlightenment

(復習)

- 理性的思惟によって宗教的權威や王侯貴族に抵抗した

啓蒙思想 からの 絶対王政批判（政治的側面）

啓蒙思想 からの 絶対王政批判（政治的側面）

イマヌエル・カント (1724 – 1804) Immanuel Kant

「自己みずからの悟性 を使用する勇気をもて」

カント 『啓蒙とは何か』 (1784 = 1974)

悟性：「感性によって得た所与を認識へと構成する概念能力」(広辞苑)

※ 経験によって得た知恵。「実践理性」。ここから、あるべき姿 (道徳) としての「当為」へ。

啓蒙思想 からの 絶対王政批判（政治的側面）

イマヌエル・カント (1724 – 1804) Immanuel Kant

「自己みずからの悟性 を使用する勇氣をもて」

カント『啓蒙とは何か』(1784 = 1974)

悟性：「感性によって得た所与を認識へと構成する概念能力」(広辞苑)

※ 経験によって得た知恵。「実践理性」。ここから、あるべき姿(道徳)としての「当為」へ。

- 個人の「『真善美』以外のいかなる権威にも服従するな」の意
- 「カントの『啓蒙とは何か』は、、、
「王権」と「宗教」の**伝統主義的な権威を破壊**するための闘争目標」

啓蒙思想 からの 絶対王政批判（政治的側面）

イマヌエル・カント（1724 – 1804） Immanuel Kant

啓蒙主義は「伝統主義的な権威を破壊」を志向する

→ 伝統的権威による社会の「リセット」を志向する

「啓蒙思想は人間活動の全領域において、

すべての過去の伝統と権威を支えていた思想、制度にたいして、

『御破算で願ひましては』とゼロ地点に出発点を求めるよう

要求するのである」

[松宮 : 99 f.]

この「リセット」への志向こそ、同時代人らによる、

「無垢なる自然状態」、「善良な未開人」（ルソー）への共感につながる。

「 啓蒙のユートピア [※ が提示したもの] とは
宗教と政治の伝統主義と権威主義を全否定し、
世界市民としての人間が中心となった、
新たな市民共同体の青写真 [※ = 未来設計図] なのである 」

「 過去のすべての伝統と権威をリセットして、
新しい社会秩序と価値体系を創造していこうとするのが、
啓蒙のプロジェクトなのである 」

国家運営からのキリスト教の排除

したがって、啓蒙思想がもたらした革命によって

誕生した市民国家においては、

実際に、その体制からキリスト教など伝統的・権威的な宗教が
排除された。

→（フランス革命後のジャコバン独裁時のキリスト教否定 など）

しかし、それでも国家には、やはり何らかの宗教が必要であった。

それは国の統治を円滑に進めるためである。そこで、

新しい「市民国家」には、新しい「市民宗教」が求められた。

それは、啓蒙主義的な理性に基づいた宗教だ。

例えば、フランス革命後のロベスピエールは「最高存在」という

理性崇拜の新宗教を人為的に創設した（→「最高存在の祭典」）。

新たな国は、新たな理性的な宗教を求めた。

それを作りあげるための拠り所として

白羽の矢が立てられたのが、

アルス※（科学、技術、芸術）であった。

したがって、近代ではこれらへの価値付けが高くなる。

※ ラテン語 ars。「術」の意味。手段、方法、手だて。

[松宮 54-55]

文化的分野で、啓蒙主義的な「リセット」を行なったのが、

ヴィンケルマン

J.J. Winckelmann (1717 – 1768) ドイツの美術史家



画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

文化的分野で、啓蒙主義的な「リセット」を行なったのが、

ヴィンケルマン

J.J. Winckelmann (1717 – 1768) ドイツの美術史家

『ギリシア美術模倣論』 (1755)

- 享乐的・感覚的な宮廷文化を表すロココ文化の批判
- ロココ文化を 啓蒙主義的に「リセット」
- 「リセット」後の規範を、古代ギリシャ芸術（彫刻）にもとめた。
- 一旦、リセットした後、新たな進歩的な文化の創設を志向した（新古典主義へ）

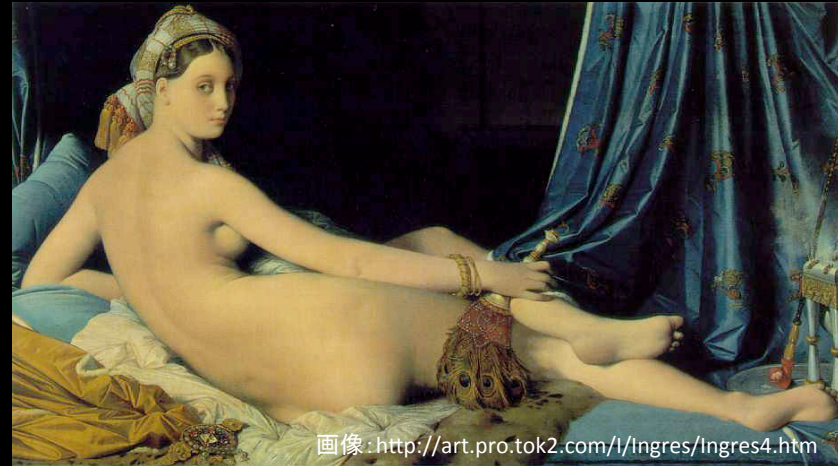


画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より



画像:<http://art.pro.tok2.com/I/Ingres/vv009.htm>

《オイディプスとスフィンクス》(1808)



画像:<http://art.pro.tok2.com/I/Ingres/Ingres4.htm>

《グランド・オダリスク》(1814)

新古典主義絵画 ジャン=オーギュスト・ドミニク・アングル (1780 - 1867, 仏)

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、
啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

1. 〈創造性〉は神のみがもつという神話がダメ

2. 自然、それ自体を模倣することがダメ



画像：wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、
啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

1. 〈創造性〉は神のみがもつという神話がダメ

- ※ 人間だって創造することができる。場合によっては「天才」になれる。
- ※ 人間中心主義、機械論、進歩主義などの現れ

2. 自然、それ自体を模倣することがダメ

- ※ 自然を、ではなくて、ギリシア美術の作品を模倣すべし。
なぜなら、ギリシャ彫像の輪郭の美は、自然美と理想美の
両者を一つにする最高の観念だから。線描への価値付け。
(ヴィンケルマン 30)。

- ※ シャルル・バトウーにみる「自然模倣論」への批判
- ※ まさに「ギリシヤ美術模倣論」。
- ※ 人間中心主義、合理的精神のあらわれ？



画像：wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、 啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

「人間の精神は本来何も創造することができない。、、、

天才が、、、気紛れから自然の法則に反する組み合わせを作る

とすると彼は『自然』を貶め、かくて彼自らを貶めることになり、
一種の狂気に陥る。

〔自然の限界を〕超えるや人は、自らを見失い、、、一種の混乱を

生み出し、歡喜というよりはむしろ不快をひき起こすことになる」

シャルル・バトウー (1747 = 1984) 『芸術論』山縣熙訳、近代美学双書、p.26
(啓蒙主義的芸術論の批判対象としての「自然模倣論」の当時の代表格)。

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、 啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

「人間の精神は本来何も創造することができない。、、、

天才が、、、気紛れから自然の法則に反する組み合わせを作る

とすると彼は『自然』を貶め、かくて彼自らを貶めることになり、

一種の狂気に陥る。

〔自然の限界を〕超えるや人は、自らを見失い、、、一種の混乱を

生み出し、歓喜というよりはむしろ不快をひき起こすことになる」

いや、人間の精神は創造することが出来る！（啓蒙主義的芸術論）

近代の市民国家においては、新しい理性的な宗教が求められた。

その拠り所となったのは、アルス（科学、技術、芸術）であった。

イギリスやフランスでは、このうち、特に「科学と技術」が価値付けられた。

一方、ドイツでは、「芸術」が価値付けられた。

つまり、特に、ドイツでは、以後、「芸術」が、新たなる宗教的な位置にまで、
価値付けられていくことになる。

新たなる神として位置づけられた「芸術」は、超越的であり、
人間の世界から隔絶された、普遍なる存在であることが求められた。

ここにおいて、「芸術の自律性」が問われるようになる。

音楽でのベートーヴェンは、このような芸術を具現化しうる、
「天才」として、代表的な存在となる。

かくして、芸術は自律化の道を辿り、その規範は「音楽」に求められること
になる。

「すべての芸術は音楽の状態を憧れる」

ウォルター・ペイター (文学者、批評家) 1877年

※ 音楽は外界の模倣に表現が依存せず、たとえば器楽曲のように、人間の世界を超越するかのよう、作品自らの形式のうちに逐次に内容表現する表現とみたため。

主な参考文献・さらなる知識のために

小田部胤久 (2009) 『西洋美学史』 東京大学出版会。

熊野純彦 (2006) 『西洋哲学史：近代から現代へ』 岩波新書。

岡田暁生 (2005) 『西洋音楽史：「クラシック」の黄昏』 中公新書。

松宮秀治 (2008) 『芸術崇拜の思想』 白水社。

村田誠一 (1999) 「近代の終焉? : 芸術的表現の可能性と限界」、神林恒道ら編『芸術における近代』 ミネルヴァ書房。

ヴィンケルマン (1755 = 1976) 『ギリシア美術模倣論』 澤柳大五郎訳、座右宝刊行会。

バトラー (1747 = 1984) 『芸術論』 山縣熙訳、近代美学双書。

以上